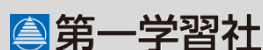


大学入学共通テストの 試行調査について

元大阪府立岸和田高等学校指導教諭 南 英世



① 「共通テスト」について

31年間続いてきた「センター試験」に代わって、2021年1月より「大学入学共通テスト(以下、共通テスト)」が導入される。共通テストに移行する理由は、一つには「思考力・判断力・表現力」をより重視した問題を作成するためであり、さらに2022年度から始まる新学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」に対応するためでもある。

共通テストの実施に先立ち、2017、18年に二度の試行調査(プレテスト)が実施され、それぞれ約6万人、約8万人の高校生が参加した。2021年からの共通テストでは、「現代社会」でどのような出題が予想されるのだろうか。二度のプレテストを参考に、傾向と対策について、その方向性を探ってみた。

② 「共通テスト」プレテストの出題傾向

■ 大問数、設問数

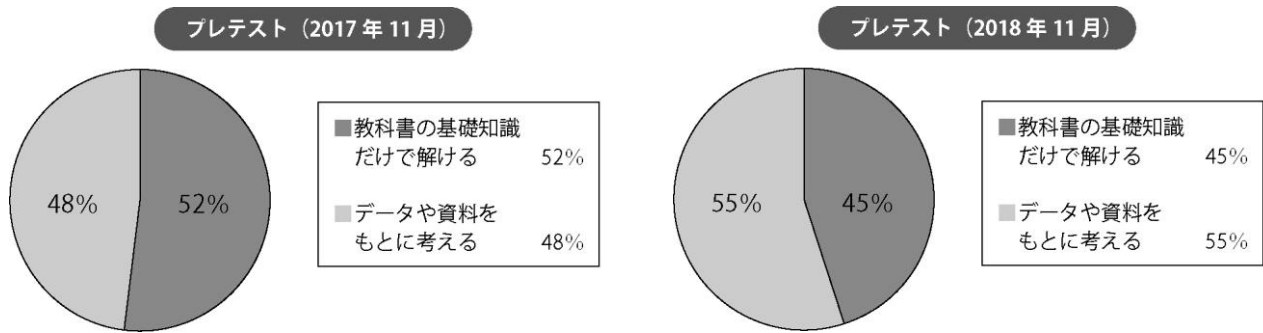
大問数および設問数は、以下のとおりである。2017年の23問に比べ、2018年では33問へと設問数が大幅に増加しており、また、問題文の分量も2018年では2017年の1.5倍程度に増量されている。

	大問数	設問数
2017年11月実施	5問	23問
2018年11月実施	6問	33問

■ 難易度

出題内容は大きく、①教科書の基礎知識だけで解ける問題、②データや資料をもとにその場で考えて解答する問題、の二つのタイプに分類できる。もちろん、両方の要素を含む問題もあり、明確に二種類

に分類することは難しい。ここでは、参考までに分類した結果をグラフに示した。



問題数が増えた上に、思考力・判断力を問う設問が半分以上を占めるようになったため、2018年のプレテストの難易度は上昇したと考えられる。学力の高い高校生でも、制限時間内(60分)で解答するのは厳しかったのではないだろうか。

■ 出題形式

複数の正答が存在する(または、解答群が組み合わせになっている)問題が、2017年の6問に対し、2018年では11問になった。また、データや資料文の読み取りに関する問題は、2017年の6問に対し、2018年は10問となった。いずれも増加傾向にあり、これは全体的な難化傾向を示しているといえる。

③ 「共通テスト」プレテスト・大問ごとの分析

■ 2017年プレテスト

大問	出題のねらいと問われている学力
第1問	ベンサム功利主義、ロールズの正義論を提示し、その基礎的な考え方と政策への応用を出題。さらに、結論を得るための推論の妥当性を問う。教科書の基礎知識で対応可能。
第2問	青年期と自己形成の課題に関する出題。教科書レベルの基本的な問題が多い。
第3問	経済分野全般にかかわる出題。教科書の基礎的な理解だけではなく、それを応用する力がないと正答は難しい。特に、解答番号12の資金の需要曲線・供給曲線の問題は、正答が複数ある上、文章がわかりにくいこともあって難問である。
第4問	政治分野全般にかかわる出題。教科書の基本知識で解ける問題が多い。ただし、解答番号15の選挙制度に関する問題は、8つの選択肢のうち、正答が5つあり、これらすべての正答を導くのは難しいと思われる。また、解答番号18は、民法の成年年齢引き下げをめぐる反対論の根拠にかかわる資料を、6つの中から2つ選ぶという問題で、一見難しそうに見える。しかし、これはデータの活用能力を問う問題であり、データの細部にわたる分析は必要ではないため、解答は容易である。

大問	出題のねらいと問われている学力
第5問	統治機構にかかわる出題。大半は教科書の基礎知識で対応可能。解答番号22は、最高裁が違憲と判断した判例にかかわる問題で、教科書に載っている基本的な判例の知識さえあれば、消去法で解ける。また、解答番号23は、5人の学生が裁判員制度に「賛成か、反対か」を識別する推論問題である。これはリード文全体の流れの中で判断する新傾向の出題といえる。

■ 2018年プレテスト

大問	出題のねらいと問われている学力
第1問	行政、青年期、幸福・正義・公正に関わる内容を、学校新聞を作成する設定の中で出題。その場で考えさせる問題であるが、ほとんどは教科書の基礎的知識があれば解答が容易である。ただし、解答番号7のラッセルの文章は判断に迷う可能性がある。
第2問	地方自治、行政、国際政治に関する出題。リード文はなく、設問ごとに違うテーマが出題されている。すべて教科書の基本知識で解ける。ただし、解答番号14は、正確な年号を知っていないと解けないので、難しいと感じる可能性がある。
第3問	在外国民にも国政選挙の選挙権を認めるべきかという最高裁判決文を用いた出題。判決文はわかりやすく、設問も教科書の基礎的知識で解ける。特に、解答番号22の文章を正しい順番に並べる問題は、論理的思考を問う良問といえる。
第4問	アダム＝スミスの『国富論』の日本語訳を題材に、スミスの理論と日常生活への応用力を出題。あわせてリカードとリストの貿易政策の違いについても問う。いずれも、教科書の丸暗記では対応できないと思われる。
第5問	「持続可能な社会」(SDGs)をテーマにした、その場で考えさせる出題。特に、解答番号30・31は、消去法によって選択肢が順番に消えていき、最後に正答が一つに絞り込まれるという形式の問題となっている。解法さえわかれば難しくない。
第6問	「食」をめぐる社会問題とその解決をテーマにした出題。データの活用能力や、意見を論理的に分類する力が問われている。解答番号32の「キ」のグラフについて、リーマン・ショック(2008年)によって金融緩和が行われ、穀物価格が高騰したことをグラフから読み取るのはやや難解である。

④ 考えられる「共通テスト」対策

高校教育は高等学校学習指導要領に準拠し、「平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」を育成することをめざす。新学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」を、今後の授業の中で、どのように推進していくか。今回のプレテストを通じて、垣間見えたことを指摘したい。

■ 基本は教科書

1990年1月にセンター試験が導入され、大学入試は難問・奇問を排した基礎的知識を中心に出题され

るようになった。そのおかげで、高校教育現場の授業は、基本的知識の習得に多くの時間を割くことができるようになった。2021年1月に共通テストが導入されても、基礎・基本を重視するというこれまでの基本方針は変わらないと思われる。したがって、授業も基礎的知識を深めるという従来の授業方針でよいと考えられる。

■ 思考力・判断力、データの活用能力の育成

2018年のプレテストの大きな特徴は、思考力・判断力を問うたり、データや資料の活用能力を求めたりする問題が多く出題された点である。単に教科書の太字の重要用語を丸暗記しただけでは対応できない問題が随所に見られた。今までの授業が、教えられたことを効率よく覚える「注入主義」であったとすれば、これからの共通テスト対策を見据えた授業では、日常生活にかかわるテーマについて、データや資料を活用して論理的に考える工夫をすることが必要とされている。

そもそも「教育」は「教」と「育」の二つの文字からなり、“Education”には「引き出す」という意味もある。これまでは、どちらかという「教」に力点が置かれていた。しかし、これからの時代に求められるのは、「育」も重視した授業である。正答をすぐに与えるのではなく、生徒に考えさせて「待つ」。この「待つ」ということも重視される必要があるだろう。その意味では、「探究学習」や小論文の作成・レポートの作成など、生徒が主体的に取り組む学習場面を多くすることが求められているともいえる。

■ 学力の背景としての国語力の育成

2018年のプレテストのもう一つの特徴は、問題文の量が大幅に増加したという点である。2018年のプレテスト並みの問題文を、60分という制限時間の中で読み、理解し、設問に答えるというのはかなり大変である。学力の基礎としての国語力が求められているとあってよい。

インターネットの発達によって、高校生は書籍を読まなくなっている。クリックをすれば、何でも情報が手に入ると思っている高校生も多い。確かに、インターネットは便利なツールである。しかし、書籍を読むことが不要になったわけではない。広く読書習慣を身につけさせ、学力の底上げを図ることが求められている。

5 「大学入学共通テスト」に関する今後の予定

2019年（3月まで）	・ 試行調査(プレテスト)の分析結果の公表
2019年（4月以降）	・ 実施大綱の策定・公表 ・ 出題教科・科目の策定・公表
2020年（4月以降）	・ 実施要項の策定・公表(時間割, 出願期間)
2021年（1月）	・ 「大学入学共通テスト」の実施

(平成30年12月7日)

本分析資料のほか、他教科・他科目の分析資料(PDF)もダウンロードできます。



第一学習社

広島本社

733-8521 広島市西区横川新町 7-14

TEL 082-234-6800